

懐かしの「東洋」

大津 隆文

子供の頃地元名古屋の東山動物園が東洋一、と聞いて大変嬉しかった。また、新聞で日本人ボクサーが東洋チャンピオンになった、という記事を見た時は誇らしく思った。振り返ると昔は「東洋」という言葉をよく見聞きした印象があるが、最近はそうでもなくなつた。

地域概念としては東洋よりアジアの方がより明確なためだろうか。東洋というのは西洋に対峙する言葉だが、対西洋というような意識が薄れたためだろうか。日本、日本人の活動範囲が東洋よりもっと広い世界に広がっているためだろうか。

たしかに東洋の範囲は必ずしも簡明ではない。元来は海域の呼称だったというが、文化圏として、トルコから東のアジア、次に中東を除いた東南アジアから極東、さらには東アジアのみと色々な使い方があるようだ。

ちなみに東洋ボクシング連盟も結成当時の参加国はタイ、フィリピン、日本の僅か三カ国であったが、現在は東洋太平洋ボクシング連盟として十九の国・地域が加盟している。

戦前は西洋と対峙するという意識がかなり強かった。事実西洋諸国がアジア諸国を席巻していた。他方文化圏としては中国文化が大きな存在感を維持していた。敗戦により「西洋何するものぞ」という気概が失われてしまったのか。西洋も帝国主義、植民地主義から脱し民主化したのか。

そして日本、日本人は今や東洋一ではなく世界一を目指し、世界を相手にグローバルに活動している。

とはいえ日常生活でまだまだ東洋の二文字を目にすることがある。経済面では上場企業の東洋紡、東洋水産、東レ(東洋レーヨン)、マツダ(東洋工業)等、文化面では東洋大学、東洋経済新報社等が浮かぶ。

ある識者によれば東洋のつく会社は関西発祥が多いという。これはかつて大阪が東洋のマンチエスターと呼ばれたように、経済面で関西に活気があった反映らしい。

東洋という言葉にノスタルジアを感じるのは昭和世代の感傷だろうか。そう言えば最近飲んだ「東洋美人」という日本酒は美味しかった。